今月の一品 令和 4(2022)年 2 月

飯能市立博物館 きっとす 今月の一品

飯能市立博物館

千歯扱き

波田 尚大

今月ご紹介するのは双柳の島田家、大河原の大河原家で使用していた千歯扱きです。千歯扱きとは、櫛状に並んだ刃のある道具で、収穫した稲穂や麦穂から籾を扱き取る際に使用します。

千歯扱きを使った脱穀(市民学芸員)

当館蔵の千歯扱きは他にも数点存在しますが、この 2 点については墨書や焼き印などが確認でき、その製作年代や目的、生産地などを知ることができます。

千歯扱きの墨書の中で特に目立つのが、飾り文字ともいわれる墨書です。両者の屋号とともに、「無頼飛切 伽羅鋼請合」と書かれています。これは千歯扱き独特の宣伝文句です。

刃の形状は、島田家が槍打(△型)、大河原家が面取打(〔〕型)の形状であり、ともに明治時代以降に作られた形式です。大河原家の千歯扱きの刃には「明治 45(1912)年」と刻まれており、修理痕がないことから、その製作年代がわかります。

島田家の千歯扱き

福井県若狭地方では刃の間隔によって稲穂用か麦穂用か決められており、稲穂用は五厘(1.515mm)、麦穂用は一分目(3.03mm)が通る幅で作られていました。島田家のものは約 1mm、大河原家のものは約 3mm 程なので、この基準で言えば前者が稲穂用、後者が麦穂用だったと考えられます。後者については墨書で「大小麦」との記述があるので、間違いないでしょう。

大河原家の千歯扱き

墨書や焼き印をみると、共に「武蔵国 伊草」で製作されたものだとわかります。「武蔵国 伊草」は現在の埼玉県川島町伊草地区に該当します。参考文献によると、近隣では、入間市や東村山市などで伊草の千歯扱きが使われていました。入間市では「旧宮寺村の坊では麦の収穫前に伊草のコキ屋がコキナオシにまわって来た」という報告があり、伊草が千歯扱きの生産拠点であったことを伺い知ることができます。

民具研究の成果は日々蓄積されています。こうした成果を活用しながら、当館収蔵品を飯能及び近隣地域の歴史・文化を物語る資料として再評価していく作業を進め、今後も情報発信をしていきます。(民具 No.943/1282)

【参考文献】

編集・発行 入間市博物館 アリット・フェスタ 2000 特別展図録『アリッ！と驚く初公開～モノから資料へ～』平成 12(2000)年 11 月 1 日/編集・発行 川島町『川島町史』地誌編 平成 16(2004)年 3 月 25 日
編集 横浜市歴史博物館『千歯扱き 倉吉・若狭・横浜』横浜市歴史博物館・(公財)横浜市ふるさと歴史財団 平成 25(2013)年 1 月 26 日/大薮 裕子「改訂 千歯扱きにみる東村山」 編集 東村山ふるさと歴史館『東村山市史研究』第 26 号 東京都東村山市 平成 29(2017)年 3 月 17 日